

『日本風景論』における朝鮮半島の景観への言及について

—— 教科書に志賀重昂を登場させることは適切か ——

米 地 文 夫*

(1996年12月9日受理)

Fumio YONECHI

Description on Landscapes of Korean Peninsula in "Nihon-fukeiron"

-Is it pertinency to mention S. Shiga's Name and Works in Schoolbooks? -

はじめに

志賀重昂の名は高等学校社会科の教科書に登場し、高校生にはいわば「偉い人」として受け取られ、試験に備えて主著『日本風景論』の名とともに暗記されたりしている。

彼の代表作『日本風景論』は、近代日本の名著の一冊であるとされ、1894(明治27)年の刊行後、一世紀余りを経て、今なお復刊などが相次いでいる。反面、この『日本風景論』への疑惑も次第に明らかになってきており、特に三田(1973)や黒沼(1976,1991)は『日本風景論』には洋書からの剽窃があるという指摘を行った¹⁾。

私は自然地理学的な視点から検討し、この書の核心部である富士山に関する数学的記述が、実は Milne 論文(1886)からの剽窃であることを見だし、その剽窃は日清戦争開戦直後という状況のなかで、国粹主義を鼓吹するための操作であったと考えた(米地1989,1990)。また同書には私が「地名による侵略」(米地1996a)と名付けた、アジア各地への日本の侵略を地名を用いて推し進めようとする意図もみられる。さらに『日本風景論』を全体的にとらえると、そのキマイラ的性格すなわち雑多なつぎはぎの怪物的な書であるとともに侵略主義鼓吹の書であることを指摘した(米地1996b)。(なお、『日本風景論』の中の独立的な章「火口湖」については別稿で詳述する予定である。)

志賀の『日本風景論』は、火山に多くの紙幅を割き、日本の火山賛美を行う一方、火山がほとんど無い国の景観に関しては酷評している。それは志賀が『日本風景論』によって、日本国民の清国に対する敵愾心や優越感を鼓舞しようとしたため、火山の少ない清国の景観を貶め、卑しめたのである。私はこの小論において、朝鮮半島の景観が、いわば、その巻き添えとなって、志賀に侮蔑的記述をされたことを明らかにするとともに、社会科(ないし地理歴史科、公民科)において志賀を取り上げる場合の問題点をも指摘したい。

*岩手大学教育学部

I 志賀重昂は教科書でどう扱われているか

志賀重昂が、現在の高等学校の地理歴史科や公民科教育のなかで、どう扱われているかを日本史および倫理の教科書に（社会科時代のものも加えて）みてみよう。悉皆調査はできなかったが、手元で参照できたもの²⁾のみを挙げて、次のように多数にのぼる。

〈日本史〉

| | | | |
|-----------|-------|---------|------|
| 詳説日本史（新版） | 山川出版社 | 井上光貞ほか著 | 1983 |
| 高等学校 日本史 | 学校図書 | 永原慶二ほか著 | 1983 |
| 新日本史 | 自由書房 | 江坂輝弥ほか著 | 1983 |
| 高等学校 日本史 | 清水書院 | 黛弘道ほか著 | 1984 |
| 改定日本史 | 東京書籍 | 尾藤正英ほか著 | 1994 |
| 詳説日本史 | 山川出版社 | 石井進ほか著 | 1994 |
| 日本史B | 第一学習社 | 坂本賞三ほか著 | 1995 |

〈倫理学〉

| | | | |
|---------|------|---------|------|
| 倫理 | 中教出版 | 勝部真長ほか著 | 1983 |
| 高等学校 倫理 | 数研出版 | 田丸徳善ほか著 | 1996 |

以上の教科書にはいずれも、志賀の名が挙げられており、三宅雪嶺とともに国粹主義を唱え、雑誌『日本』を刊行したことが記述されている。以下にそれらの代表的なものを示してみる。『詳説 日本史』（山川出版社、石井進ほか著、1994）には、志賀についてはこのように述べられている。

欧化主義と国権論の関係は、条約改正問題をめぐってより複雑になり、平民的欧化主義となえる徳富蘇峰らと、近代的民族主義を主張する三宅雪嶺、志賀重昂、陸羯南らとのあいだで論争がくり広げられた。

なお、この文に脚注がついており、まず蘇峰らの主張を説明し、次いで「これに対して雪嶺や羯南らは、同じく一般国民の幸福を重視しながらも、その前提としての国家の独立を重視し、民族主義を強調した」と記している。この記述はほぼ歴史的事実で妥当である。また、『高等学校 倫理』（数研出版 田丸徳善ほか著、1996）も、徳富蘇峰らの民友社の雑誌『国民の友』とその唱える平民的欧化主義について説明したのち、次のように歴史的事実を記している。

他方三宅雪嶺・志賀重昂らは、翌1888(明治21)年政教社を創立し、雑誌『日本人』を発刊して、近代的民族主義の立場から欧化主義を批判し、徳富と論争した。民族の歴史的使命を自覚し、国民性を尊重し、国家の独立を重視すべきであるとし、国粹主義（国粹保存主義）を唱えたのである。

以上の記述は、志賀が「教科書に載るほどの偉い人」と単純に理解されやすいこと以外には、特に大きな問題はない。しかしながら、なかには彼の業績をきわめて高く評価し、美化し過ぎた伝え方をしていると考えられるものもある。そのような類いの教科書（『高等学校 日本史』清水書院1984）の記載例を示してみよう。

1880年代に、国民は、松方財政下で苦しんだが、この国民の感情を無視したまま進められた極端な欧米模倣の欧化主義に対して、地理学者志賀重昂は、東京や県庁所在地中心の欧化であると批判し、真の開化は、「地方全般の民」が富むことだと主張した。（中略）

1888年、三宅雪嶺・志賀重昂・井上円了・島地黙雷らは、政教社をつくり、雑誌「日本人」を刊行して、欧米追隨の条約改正に反対した。その主張は、国粹主義であったが欧化そのものに反対したわけではなかった。

（以下は囲み、いわゆるボックスとして書かれている）

志賀重昂と三宅雪嶺

志賀は、欧米諸国によって占領され植民地化されたオーストラリアや南洋諸島を巡歴し、『南洋時事』（1887年）をあらわして、「文明国」の侵略に警鐘を打ち、『日本風景論』では、日本の自然・風景の美しさを説いた。これらの著作は、各国民が自国文化の長所・独自性を自覚し、相互にそれを尊重し、世界文化の発展に寄与すべきであるとする理想に支えられていた。（後略）

以上の記述のうち、特に問題であるのは、最後の3行余の『日本風景論』などの著作の評価であろう。私は、その教科書の記述とは逆に、彼の代表作『日本風景論』は、他国の欠点を指摘し、自国の優位を主張する偏狭な書であるのみならず、敵国清への敵意や反感がこめられ、外国人の著作からの剽窃などもみられる、問題点の多い著作であると考えている。

II 志賀重昂『日本風景論』はどのような構成か

1 『日本風景論』に火山および火山岩論はどう位置づくか

『日本風景論』は大別すれば四つの大テーマからなる。それらは次の四章をなしている。

「日本には気候、海流の多変多様なる事」：内容はむしろ生物論である。

「日本には水蒸気の多量なる事」：内容は気候論である。

「日本には火山岩の多々なる事」：内容は火山および火山岩論である。

「日本には流水の侵蝕激烈なる事」：内容は地下水、河川、湖、海などの水蝕論である。

この中で、火山および火山岩論「日本には火山岩の多々なる事」は『日本風景論』の中でも中心的な部分であり、最もよく知られた箇所でもある。この部分のみで『日本風景論』のほぼ半分を占め、他の三つの大テーマを合わせたものの倍近い頁をこのテーマに費やしている。（またこの章の付録とはいえ火山岩の部分と匹敵する分量の「登山の気風を興作

すべし」は、日本の近代アルピニズム誕生の機縁を与えたものとして有名である。）

すなわち、大づかみにすれば、『日本風景論』の半分は火山とその関連の事項、四分の一は生物、気候、陸水や海による侵食、などからなり、残りがその他となる。

この火山の部分の中で、濟州島やベクト（白頭）山を除けば火山のほとんど無い朝鮮半島の風景が論じられているのは、奇妙である。それが何のために書かれているのか、を解くのが本稿の目的の一つである。

2 「日本には火山岩の多々なる事」はどう構成されているか

「日本には火山岩の多々なる事」の章の構成（初版）は次の通りである。

（◇）の中の見出しと記号 a～c は米地が仮に付したもの）

| | | |
|-----------------------|-------|------|
| 《a 日本の火山脈》 | 1 頁 | |
| （一）日本の風景と朝鮮、支那の風景との比較 | 2 | |
| （二）日本の火山 名山の基準 | 3 | |
| （三）富士山 | 2. 5 | |
| （四）千島列島の火山 | 2. 5 | |
| （五）北海道本島の火山 | 2. 5 | |
| （六）本州東北の火山 | 9 | |
| （七）中部日本の火山 | 7. 5 | |
| （八）南日本の火山 | 14. 5 | |
| 《b 英国との比較》 | 2 | |
| （九）日本火山の緑色 | 0. 5 | |
| （十）火口湖 | 4 | |
| （十一）玄武岩 | 6. 5 | |
| 《c 火山力の功罪》 | 2. 5頁 | 計60頁 |

上記の内容を大きく括ってみると、次のようになる。

| | | |
|----|--------------|-------|
| 序論 | （a） | 1 頁 |
| 総論 | （一）～（三） | 7. 5 |
| 各論 | （四）～（八） | 36 |
| 補論 | （b, 九～十一, c） | 15. 5 |

総論の最初に「（一）日本の風景と朝鮮、支那の風景との比較」が置かれていることは、この部分が、『日本風景論』の中心である火山および火山岩の論述のために不可欠と志賀が考えていたことを示すものであろう。

Ⅲ 志賀重昂『日本風景論』における朝鮮半島の景観の取り上げ方

1 「日本の風景と朝鮮，支那の風景との比較」に何が書かれているか

「日本には火山岩の多々なる事」の「(一) 日本の風景と朝鮮，支那の風景との比較」は次のように書かれている。

想ふ火山岩たる，元と地皮の斂縮せる際，熱気を揮霍し，余怒激して爆然外に噴き来り，噴き来りたる溶岩の外気に触れて収縮せしもの，故にその状や槎牙重複，裂くるが如く，欠くるに似，あるいは刻削せる壁の如く，あるいは斧鑿せる柱に似，譎奇変幻具状すべからず，日本表土の五分の一実はこの岩に成るとせば，景物の警拔秀俊なる固より知るべきのみ。けだし朝鮮の如き，多くは原始紀，太古紀の地質に係り，火山岩たる少々。支那の如き…(中略) 固より火山岩国たる日本の景象到る処警拔秀俊なるに似ず。(後略，文中の下線部は米地が付した)

驚くべきことには朝鮮，支那の風景との比較と題しながら，朝鮮半島に関する言及は上記の文中，下線部のわずか約30字に過ぎない。朝鮮半島の一つの地名もなければ，風景に関する記述もない。今日では有名な景勝地金剛山はこの後にイサベラ・バードによって世界にその美が知られ，日本には高島北海によって紹介されるので，志賀が知らなかったことは不思議ではないが，他にも多くの景勝地があることは，当時でも少し朝鮮半島について知識があれば分かったはずである。にもかかわらず，その景観を地質図からのみ判断し，火山岩が少ないという一点のみで，日本の風景に及ばないと断定しているのである。一方，支那(中国)の風景については，黄土地帯を次のように具体的に書いている。

…上には黄雲慘憺とし，満眸皆な黄色，一山一峰のこの際に聳起するなく，風物の単一同様なる真個に行客を倦殺しむと，いはんやもし北風直ちに蒙古より到るや(中略) 殺風景の極を尽くす，

また，中国の南方については次のように述べる。

その南方に到れば，十中の七，八は太古紀，中古紀の岩石に成り，森林は幾千年濫伐し去りて巨木高樹の幽邃少なく(四川省，揚子江の上流を除きては)，僅に蘋蓴一様の画を描きて仮形的に山水を眼前に現はし，いはゆる「臥遊」して以て聊か自ら慰むるに過ぎず，

志賀は，この当時，対外強硬政策を唱える雑誌『亜細亜』の編集人として，好戦的主張をする硬派の中心人物であった。1894年の10月，彼は「対外硬六派連合」という組織の幹事となり，全国の百数十社が加わった新聞雑誌同盟の代表幹事に推挙されている。中国の批判を行うのがこの文の真の目的だとしても不思議ではない。

このような点に既に注目していたのは，三田(1973)である。三田は次のようにいう。

「…(内村)鑑三の教示にもとづいて、『日本風景論』が中国についてどういう態度を示しているかを調べてみると、『黄塵万丈』の黄土に対する非難と、メタンガスのわく洞庭湖・西湖にわが国の火口湖を対比している個所が目につく。」

三田(1973)が「鑑三の教示」といっているのは、内村鑑三の『日本風景論』に関する書評のことである。内村(1894)は「国粹保存論の提起者志賀氏は純粹の日本人なり」と述べ「目下吾人の讐敵なる支那本土に対する彼の敵愾心の如何に激烈なるよ」と彼すなわち志賀の記述を紹介している。さらに「日本は美なり、園芸的に美なり、公園的に美なり、然れど吾人をして他洲に譲る所あらしめよ」と世界には他にも偉大な風景美のあることを述べて志賀を批判している。しかし、このような客観的で冷静な批評は、当時の日本では受け入れられないことをも意識して、内村はこう結んでいる。「愛国心上騰の今日に方て(あたって)此非国家的の言を發す批評家の任亦難かな」³⁾

敵愾心によって歪められているとはいえ、中国の風景については、とにかくにも、志賀は具体的なイメージを持っていたから朝鮮半島の場合よりはましである。彼の教養の基礎は漢学であったので、漢詩などを通じてある程度の知識は有していたのである。しかし、朝鮮半島に関しては、少なくとも、この箇所に具体的に書くほどの材料は持ち合わせていなかったのである。とすれば、次に疑問となるのは、なぜ志賀にとって、その風景をイメージすることが困難であった朝鮮半島をも取り上げたのか、という点である。

2 志賀はなぜ朝鮮の風景に言及したのか

志賀の意図が、清(中国)の風景を誹謗することにあつたことは確かである。しかし、なぜ志賀にとっては書くべき内容をほとんど持ち合わせていなかった朝鮮半島をも取り上げ、「(一)日本の風景と朝鮮、支那の風景との比較」と、中国よりも前に名が挙げられているのであろうか。その理由として考えられるものは次の三つである。

- ① 中国に対する批判のみに見えるのをカモフラージュするため
- ② 中国と朝鮮半島との共通性ないしは東アジアにおける近接性のため
- ③ 当時、日本が中国と朝鮮半島の支配権を争っていたため、中国同様、朝鮮半島も日本の力の前に屈すべきと考えていたため

①であった可能性は低い。私は志賀が当初②を意識していたが、開戦の機運の高まりとともに、志賀は③のように考えていったのではないかと考えている。日清戦争前は清は朝鮮の宗主権を有しており、戦争は朝鮮半島の各地を戦場とした。大日本帝国が朝鮮半島と中国とを結びつけて武力進出の対象と見ていたように、志賀もまた朝鮮半島と中国とを一体として見ていたのである。

なぜ③であるかとみられるかという根拠の一つは、志賀は、火山岩の美しい風景をもつ国が、火山岩を持たない美しくない風景の国を支配するのが当然という考えを持っていたことである。

それは『日本風景論』中に客との対話の紹介という形の次の記述があることからわかる。

客が欧米列国には火山が無いが…と言うのに対し、志賀がこう答えたというのである。

欧米列国といふ、能く欧米列国文明の淵源する処を知るか、火山岩の上に建ちたる羅馬国実にこれにあらずや（中略）欧米列国文明の淵源果然火山岩国にあり、日本また火山岩国の天職として東洋将来文明の淵源たらざるべからず

志賀は文明というが、上記の文中の中略部分にあるローマの説明の中にシーザーやコロンプス、カヴール、ガリバルディなどのような征服者、軍人、政治家の類いの名を、志賀は列挙している。つまり志賀のいう文明とは、強国が軍事力、政治力のもとに、その国の文化の優位性を弱国に押し付けて広める類いのものなのである。

3 朝鮮半島の風景は美しくないか

この表題の問の答は、もちろん否である。朝鮮半島の景観は確かにその成り立ちが日本とは異なり、なだらかな花崗岩の山々と、その間にある小さな盆地が、代表的な地形である（米地1985）。そのたたずまいはパンソリ（謡物語）の代表作『春香伝』の舞台である南原（ナムウォン）も同じで、同書には至る所に風景を褒める言葉がある。様々な形で伝えられ、演じられた、異本のいずれにも共通する筋として、許（1956）の訳本に付された文において金台俊が書いている「あらすじ」は、こう始まる。

山うるわしく水清きをもって名高い南原。その南原に春が来て、色とりどりの花が、いまを盛りに咲き乱れている五月のある日、南原でも勝地で名高い廣寒樓に上り…

と主人公の貴公子が登場するのである。そこへ佳人が現れて話が大きく展開する。

立原正秋（1980）は、韓国の旅のエッセイで同国の風景を美しく描き、転じて『日本風景論』を批判している。その批判は次のようなものである。

志賀重昂に〈日本風景論〉という著書があるが、内容は、自然にたいする民俗（ママ）的な詠嘆を自然科学的に飾りたてた、風土学を論じたものとしては紛（まが）いもの本である。

と書き、さらに続けて、眼前の韓国忠清北道の俗離山に触れてこう、書いている。

志賀重昂のような偏狭な視線の人に、この俗離山の風景をみせたらどうだったろう、などと私は考えた。それほど私の目前にひろがっている実在の山水画は間然するところがなかった。

また、前述のイサベラ・バードの『朝鮮奥地紀行』（1898、朴尚得訳1994）にも朝鮮半島の風景が絶賛されている。彼女は日本もそれ以前に旅行しており、広く世界中を旅行していて、客観的な眼をもった旅行家である。例えば同書下巻の大同江の風景の叙述は次のようである。

壮大な絶壁とコバルト色の山岳の下を心地良いそよ風が吹くなかに金剛石がきらめいていた。そこを横切り、青い雲で斑になった九天井の下を藍色の雲の影が帆走していた。その光景は、永遠に見ていたいと思わせる程理想的に美しいものであった。

以上の三カ所は韓国南部の全羅北道の南原，韓国中部の忠清北道の俗離山，北朝鮮の大同江沿岸とそれぞれ場所も異なり，それを讚える人の国籍も違うが，美しいものは美しいのである。このほか，朝鮮半島の景観の美しさについては，多くの人々によって語られており，その取捨に迷うほどである。ところが『日本風景論』執筆時にはまだ朝鮮半島を訪れたことのなかった志賀が，軽率にも地質図のみからその地の美醜を論じたのである。

朝鮮半島は世界でも最も美しい土地の一つであると私は考える。しかし，もし，そのような土地ではなかったとしても，それぞれの土地にはそれぞれの風景があり，それぞれの美しさがあるにもかかわらず，他国，他地域の地域性を評価するような見方のできなかった志賀，日本の風景の優位を示すために火山や火山岩の地域を他より優れたものという強弁に固執した志賀は，本来，他国の風景を論ずる資格がなかったばかりか，自国の風景すら歪んだ眼で見ていたということではなかろうか。

おわりに—風景はいかに政治的に歪められたか—

ヴァルンケ（1992, 福本訳1996）は風景画に政治的風景を見だし「政治的空想はいつでも風景に寄りかかり，風景に手を着け，変造し，必要に応じて取り込む」と述べた。志賀重昂もまた政治的空想を日本や朝鮮半島，中国などの景観に載せ，ねじ曲げ，利用したのである。

志賀は典型的な明治の日本人であった。というよりは自ら明治の日本人像のモデルを演じてみせた人物ともいえるであろう。私は『日本風景論』にその「明治の日本人」志賀重昂の若き日の自画像をみる思いがするのである。詩歌を愛し風景を論ずる反面，政治的野心に燃え愛国的好戦的言辞を吐く，それが志賀重昂だったのである。だからこそ，志賀は平和で美しい理想化された日本の景観の美しさを美辞麗句をもって謳いあげるとともに，中国や朝鮮半島の景観を卑しめ，日本人の清に対する優越感を発揚させ，朝鮮半島を蹂躪する軍事行動を容認させ，いかにも戦う「明治の日本人」らしい敵愾心や海外への力による進出の野望を織り込んで，戦意を鼓舞する扇動者としての役割をも果たしたのであった。つまるところ，日本の風景を論じるのではなく，日本の風景を賛美する反面，交戦の相手国の国土を蔑視する論を唱え，風景に依據して日本という国家への献身を呼びかける書が『日本風景論』だったのである。このことは，当時は敏感に読み取られていた。このような論旨に批判的な立場をとった例外的な存在が内村鑑三であったことは先に述べた。しかし，一般には共鳴され，例えば『金城新報』の社説（1904.11.5）にみられるように「此書は洵にこれ日本の大勝利を裏面的に観察したもの」とし，これが日清戦争における大勝利の原因たる「大日本の精神」を説いたものと受け取られていた⁴⁾。

したがって『日本風景論』の景観論の根底には戦時下の時流に乗った一種の地政学的な性格がメタファーとしてこめられていた。この小論で扱った朝鮮半島の取り上げ方にみられるような杜撰な論理と隠された意図とが，実は『日本風景論』全体に秘められていたの

である。その意味では『日本風景論』は虚妄の景観論⁵⁾なのである。

社会科教育（ないしは地理歴史科・公民科教育）の立場からみると、現在の知識偏重の中では、志賀の実像を理解させることはほとんど不可能で、いたずらにその虚名？を暗記することにとどまりがちである。

一般に「日本史」という教科の文化史の学習、あるいは「倫理」という教科の日本の思想家についての学習、に登場する人名は、単に試験に出る重要な人物名と受け取られ、短絡的に「偉い人」と見做される傾向がある。のみならず、志賀の主著『日本風景論』を、『他国の文化を尊重し、世界文化の発展に寄与すべきであるとする理想に支えられた書』などと説明する教科書は、彼の虚像を作りあげたことになる。政治思想、とりわけ当時の外交政策とかかわるものについては、それを教材とする場合には十分な検討が必要であるにもかかわらず、皮相的な把握に基づいた見当違いの記述となる恐れがある。小論がこのような状況へ一石を投じるものとなれば幸いである。

なお、本稿のうち、志賀に関する教科書の扱いについては、1996年7月の岩手大学教育学部学会に発表し、朝鮮半島に関する発想は1996年9月の韓国への小旅行で得た。その旅でお世話になった韓国の方々に篤く御礼申し上げたい。

注

- 1) これに対して、人文地理学ないしは地理学史の分野では、矢守（1987）が翻案と肯定的、好意的に評価し、荒山（1989）もこの矢守の見解を支持し「風景へのまなごしを我が国に導入した翻案」と評価した。
- 2) なお、志賀の名前の登場する高等学校日本史の教科書は、近年のものを概観すると全体のほぼ半ば程度であり、それ以外の教科書では「三宅雪嶺ら」という表現に含まれている。高等学校倫理の場合、志賀の名が載るものは、比較的少数である。
- 3) 内村がこの書評を載せた『六合雑誌』168号は1894年12月15日発行である。9月の黄海海戦以来の相次ぐ戦勝に日本人が興奮していた時期だったのである。
- 4) ところが、現在では、この点を明示する論者は少なく、わずかな例外の一人が、上記社説を紹介した勝原（1979）である。
- 5) 『日本風景論』に対して、これに近い批判的な見解を明らかにした論者としては、前述の勝原（1979）や立原（1980）のほかには、例えば前田（1978）が「侵略主義、膨張主義を鼓舞する書」と述べ、ベルク（1990）は「アイデンティティ強化に利用される口実」としての役割を果たした著作と捉えている、など若干はあるものの、いまだ少数意見にとどまっている。地理学においては、近年に至るも大概（1992）のような手放しの志賀への礼讃の書が刊行されている実状である。

文献

- 荒山正彦（1989）：明治期における風景の受容—「日本風景論」と山岳会—、『人文地理』，41，551-564。
- 内村鑑三（1894）：批評・志賀重昂氏著「日本風景論」．『六合雑誌』．168.29-31。

- 大概徳治(1992):『志賀重昂と田中啓爾 日本地理学の先達』,西田書店,241p.
- 勝原文夫(1979):『農の美学』,論創社,298p.
- 黒沼健(1979):『登山の黎明』,ペリかん社,288p.
- 黒沼健(1991):フランシス・ガルトン「旅行術」と『日本風景論』,『日本古書通信』,56-8,1.
- 志賀重昂(1894):『日本風景論』 初版,政教社,220p.(復刻版 1975,大修館書店)
- ほかに次の各版を参照した。
- (1895):第5版,政教社,234p.
- (1903):第15版,博文館,234p.
- (1928):志賀重昂全集4巻,同刊行会,1-194.
- (1936):岩波文庫版,308p.
- (1976):講談社学術文庫版,上197p.下188p.
- (1980):明治文学全集37巻,政教社文学集,3-97.
- (1995):岩波文庫(新版).395p.
- 立原正秋(1980):『異邦の空・日本の旅 風景と慰藉』,角川文庫,182p.
- 三田博雄(1973):『山の思想史』,岩波新書,236p.
- 前田愛(1978):『幻影の明治』,朝日新聞社,253p.
- 矢守一彦(1987):志賀重昂—日本風景論を中心に—,『大阪大学放送講座「日本研究の先達」』,一心社,151-165.
- 米地文夫(1985):日本列島と朝鮮半島の生い立ち 動と静—最も近い地域の対照的な地史,『歴史読本』(臨時増刊),30-11.302-307.
- 米地文夫(1989):J.ミルンの地理学,特に地形学における史的意義—志賀重昂とのかかわりを中心に—,『日本地理学会予稿集』,35,284-285.
- 米地文夫(1990):志賀重昂『日本風景論』の分析—火山に関する剽窃と国粹主義の関係—,『日本地理学会予稿集』,38,46-47.
- 米地文夫(1996a):山の名に地政学はなじまない—『日本風景論』から『大地の子』まで—,『季刊地理学』,48,188-191.
- 米地文夫(1996b):志賀重昂『日本風景論』のキマイラの性格とその景観認識,『岩手大学教育学部研究年報』,56-1.15-34.
- ベルク,A.(篠田勝英訳1990):『日本の風景 西欧の景観』,講談社,190p.
- バード,I.(1898,朴尚得訳1994):『朝鮮奥地紀行』2,平凡社,414p.
- ゲイキー,A.(島田豊訳1887):『地文学』,共益商社,上248p.下336p.
- 許南麒訳(1956):『春香伝』,岩波文庫,190p.
- Milne,J.(1886):The volcanoes of Japan. "Trans.Seismol.Soc.Japan",10,1-184.
- ヴァルンケ,M.(1992,福本義憲訳1996):『政治的風景—自然の美術史』,法政大学出版局,179p.
- (『日本風景論』を論じた論考は多数にのぼるが,ここには直接,本稿と関連するもののみをあげた。また高等学校教科書についても,文中に記したので省略した。)